

雪ちゃん

寺田寅彦

青空文庫

学校の昼の休みに赤門あかもん前の友の下宿の二階にねころんで、風のない小春日の温かさを貪むさぼるのがあの頃の自分には一つの日課のようになっていた。従つてこの下宿の帳場に坐つていつもいつも同じように長い煙管きせるをふすべている主婦ともガラス障子越しの御馴染おなじみになつて、友の居ると居ないにかかわらず自由に階段を上るのを許されていた。

ここな二階から見ると真砂町まざごちようの何とか館の廊下を膳をはこぶ下女が見える。下は狭い平庭で柿が一本。猫がよくこれを伝うて隣の屋根に上るのである。庭へは時々近辺の子供が鬼ごつこをしながら乱入して来ては飯焚めしたきの婆さんに叱られている。多く小さい男の子であるが、中にいつも十五、六の、赤ん坊を背負つた女の子が交じっている。そしてその大きい目から何からよく死んだ妹に似ているので、あれは何処どこの娘かと友に尋ねてみた事がある。友の知っているだけでは彼は隣の小さい下宿の娘で、父なる者は今年七十近い爺さんで母はやつと三十くらいだとの事であつた。名は雪ちゃんうとと云つた。

その後自分は小石川へ家を持つ事になつて、しばらくの間友の下宿へも疎うとくなつていたが、悲しい事情のために再び家をたたんで下宿住いをしなければならぬ事になつた時、ちようど友の隣の下宿の二階があいているとの事で計らずこの雪ちゃんの宅に机を据える事

になった。

ここに世話になったのがかれこれ半年。あえて短い日子にっしではなかったが、こう云う事には極めて疎い自分にはこの家の家庭の過去現在について知り得られた事は至って僅かで、また強しいて知りたいと思ひもしなかった。が、主婦が新潟の人である事、主人はもとは士族で先妻に子まであった事、そして先妻がなくなったあとそれまで下女であった今の主婦を入れた事などは友や主婦自身の口から知った僅かな事実の主なる部分であった。しかし雪ちゃんが主婦の実子か否と云う事は聞き洩もつとした。尤も主婦がこの娘に対すると先達せんだつて生れた妹の利ちゃんに対するとその間に何のちがひも自分には認められなかつたとは云え。主婦は親切であつたが、色の蒼白い、眉の間には始しじゆう終憂鬱な影がちらついて、そして時々工合が悪いと云つては梯子はしごの上り下りの苦しそうな事があり、また力無い咳をすることころなどを見るとあるいはと思ふ事があつて友に計つたが、この家に数年前から泊つていて、ほとんど家内同様になつている医科の男があつてそれが一向引越しもしないところから見るとまさかそうではあるまいと云うので、格別気にも止めなかつたのである。雪ちゃんもこの色の蒼白いそして脊のすらりとしたところは主婦に似ていて、朝手ちようず水の水を汲むとて井戸繩にすがる細い腕を見ると何だかいたいたしくも思われ、また散歩に出掛ける

途中、御使いから帰って来るのに会う時御辞儀をして自分を見て微笑する顔の淋しさなどを考え、この児には何処にか病氣でも潜んでいるではないかと云う気がしていた。亡妹に似ていると云うのがますますこの感じを深くしたのである。それにもかかわらず雪ちゃんは壮健で至って元氣のよい子であった。利ちゃんが何かいたずらでもした時に叱りつける声はどうしてこの細いかよわい咽のどから出るのかと思うようで、何か御使いでも云いつけらるると飛鳥のように飛んで出て疾風のごとく帰って来る。こう云う性質のためであるか、雪ちゃんの友達は多く自分より年下の男の子であった。隣家に同年輩の娘子供はずいぶんないでもなかったのにこれらとはとにかく遊ばなかった。何故だろうと考えてみた事もあった。隣は多く小官吏であったのである。

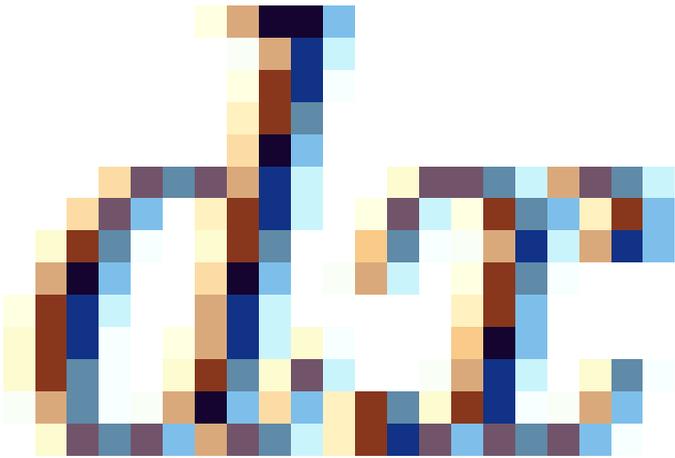
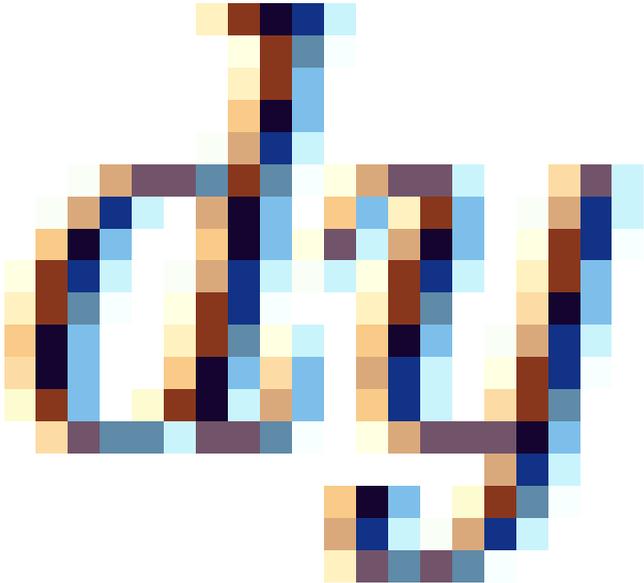
ある日の事、昼の休みに帰って来て二階へ上がった時、階段もたに凭たれてうつふしになつていた。「ドーシタノ。」聞いたが返事がなかったからそのまま駆上まがると主婦が昼飯を持って上がつて来た。雪ちゃんもついて来て入り口の柱へもたれて浮かぬ顔でボンヤリしている。眼のふちが少し赤い。ちょうど机の上に昨夕買って来た『新声しんせい』の卯花うのはな衣ころもがあつたから、「雪チャン。これを御覧。綺麗な画えがあるよ」と云うたら返事はなくて悲しげに微笑した。「ドーモまだ孩児こどもで……。」と主婦が云つた。この悲しげな微笑はい

まだに忘れる事が出来ない。

またある日の事であった。隣室の医科の男が雪ちゃんに命じて杏を買って来させて二人で食っていた。自分はやりながら聞くとともに二人の対話を聞いていたら、雪ちゃんの声で「……角かどの店のを食ったの。そりやホント二おいしいのよ。オソラク」と云った。このオソラクが甲かんばし走はしった声であったので、自分はふと耳を立てると、男の声で「オソラクってそりや何の事だ。誰に習ったのか」と軽く笑いながら問う。あとはくすぐられるような雪ちゃんの笑い声がしばらく二階中に響き渡った。

自分が暑中休暇で帰省する四、五日前、夕飯を持って来た主婦が「わたしこれから出ますが何か御使いはありませんか」との前置をおいての問わず語りに、その日雪ちゃんはどうかして主婦に叱られ、そのまま家を出てすべて帰って来ぬ故これから心当りへ尋ねて行かねばならぬとの事であった。その夕方親類のおばさんにつれられて帰って来たとはばかり、その上の事情はさらに知る事が出来なかった。

行李こつりを車へ積んで主人いしとまに暇いとまをつけ車へ上つて上を見ると、二階に雪ちゃんが立っていてボンヤリ空を眺めていた。国へ帰って後病のちを得て一年休学する事になり、友に託して荷物ものぶは親類へ預けてしまい、しばらくしての友の手紙に雪ちゃんの家は他へ譲り渡し、主人は



寺番に、雪ちゃんはある医学士の家へ小間使に上がったが、主婦に關してはすべて消息を知る事が出来ぬとの事であつた。医科の男は相変らずこの家の二階の同じ室に居ると見えて、音読の声が友の下宿の二階に聞えてしるいるそうである。

雪ちゃんとその家庭について誌すべき事はこれだけである。このむしろ長々しい、つまらぬ叙事を読んで幾分かの興味を感じる人があれば、それはおそらく隣の下宿にいた友くらいなものであろう。

(明治三十四年)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪ちゃん

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>